

初期のイェーツとその影響

——“The Song of Wandering Aengus”を中心に

河野庸二

序論

筆者が W. B. Yeats (1865-1939) の詩、特にその初期の詩集 *The Wind among the Reeds* 所収の一篇である “The Song of Wandering Aengus” に注目するようになったのはまったくの偶然からである。それ以前に知っていたイェーツの詩といえはやはり同じ詩集にあるバラード *The Host of the Air* ぐらいで、それも Lafcadio Hearn (1850-1904) の東京帝国大学での詩及び詩人に関する講義録を集めた北星堂版の古本 *Poets and Poems* 所収の *Fairy Poetry* の章を通してであった。ハーンが東京帝大で英文学を講じたのは明治29年から35年 (1896-1902) までであったが、彼が日本の学生に理解し易いように平易な言葉を選んでゆっくりとした口調で講義したのを一部の学生が一字一句たがえず筆記していたノートをもとに編集したものが日英両国で出版された事実は周知のとおりである。(ちなみに北星堂刊のこの旧版は貴重である。1922年にイギリスの Heinemann 社から出た *Appreciation of Poetry* は400ページを超える大冊ではあるが、載せられている詩人はごく限られていて、むしろ小冊子に近い北星堂版の方が内容的にはバラエティーに富んでいる。) ハーンがすでにイェーツの詩に注目していたこと自体興味深いことであるが、おもしろいのは彼がイェーツを当代随一の妖精詩人として紹介していることである。もっともそれはごく初期のイェーツしか知ることのできなかったハーンにしてみれば無理のないことかもしれない。

北星堂版の古書を手にしたのと同じころ、筆者は米国の幻想SFの第一人者として高名な Ray D. Bradbury (1920-) の短編集 *The Golden Apples of the Sun* を別の古本屋で買い求めた。何の変哲もないアメリカのペーパー・バックであるが、ためらいもなく買い求めたのは、作者の名を知っていたこともさることながら、やはり何といても強烈なインパクトをもつそのタイトルに魅せられたためであつたろう。やがてこの豪華けんらんたるタイトルが巻末に収められた表題作によるものであることと、それがイェーツ

の詩集 *The Wind among the Reeds* の中の一編 “The Song of Wandering Aengus” からの引用によるものであることがわかった。もっともこの時点ではこの詩の内容はおろか、Aengus が何者であるかも知るすべはなかった。ところが偶然は重なるものでこれと前後して筆者はやはり古本屋の店頭で、大正期の文学者として名高い厨川白村 (1880-1923) の「現代英詩選釈」(アルス社刊) を見つけて入手したところ、その中にはイエーツの短詩も数篇とり上げられていて、しかもありがたいことには “The Song of Wandering Aengus” がそのうちに含まれていた。白村のすぐれた通釈を読みながら筆者はますますこの一篇の短詩に心ひかれるようになった。その後、若き日のイエーツが故郷アイルランドの地に古くから伝わる口碑や伝説を、愛惜の思いを込めて書きつづった文章を一冊にまとめた *Mythologies* (Macmillan 社刊、初版は1959年) の存在を知り、殊にその巻頭に収められた *The Celtic Twilight* とわが国の柳田国男の名著「遠野物語」とを頭の中で重ね合わせてみたりもした。さらにはアメリカの南部作家のうち女流の代表格とみなされる Eudora Welty (1909-) の短編のいくつかに読みとれる明らかなイエーツの影響に目を見はる思いがしたこともある。要するに本稿はイエーツ初期の1篇の詩を柱として、それに関連する既述のもろもろの作品や著述に触れながらまとめ上げた筆者のイエーツ試論であるが、内容的には、ハーンと白村を顧みるという点で日本英学史的要素を、また「遠野物語」やブラッドベリさらにはウェルティの作品を引き合いに出すという点で比較文学的要素を多分に含んだものになっている。

「彷徨 (さまよ) へるいんがすの唄」の異稿その他について

The Song of Wandering Aengus

- 1 I went out to the hazel wood,
- 2 Because a fire was in my head,
- 3 And cut and peeled a hazel wand,
- 4 And hooked a berry to a thread;
- 5 And when white moths were on the wing,
- 6 And moth-like stars were flickering out,
- 7 I dropped the berry in a stream
- 8 And caught a little silver trout.

- 9 When I had laid it on the floor
 10 I went to blow the fire aflame,
 11 But something rustled on the floor,
 12 And some one called me by my name:
 13 It had become a glimmering girl
 14 With apple blossom in her hair
 15 Who called me by my name and ran
 16 And faded through the brightening air.

 17 Though I am old with wandering
 18 Through hollow lands and hilly lands,
 19 I will find out where she has gone,
 20 And kiss her lips and take her hands;
 21 And walk among long dappled grass,
 22 And pluck till time and times are done
 23 The silver apples of the moon,
 24 The golden apples of the sun.

イエーツの著作はもっぱらマクミラン社が著作権を握っているようであるが、同社から1957年に出版された集注版 *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* を一見すれば、この詩にも相当推敲のあとがあることがわかる。なお上掲の詩の各行に付した番号は同書に做ったものである。詩歌の世界では改作は改悪につながる場合が少くないが、少くともこの作品の場合は洗練に洗練を重ねて完成品に仕上げられた感が深い。そのことは異稿からその一部を拾って定本と照合させてみれば一目瞭然である。例えば**6**は *And stars like moths were shining out*, **18**の場合は異稿が2種類あってそれぞれ *In barren hills and marshy land,*; *Through hilly lands and hollow lands*, となっている。ちなみに**21** (行目) の *dappled* の解釈については邦訳において意見の分かれるところであり、例えば研究社の「英語歳時記」に載せられた解説では次のように説明されている。

「長いまだらの草」とは、ある菌の作用で、草地の一部がひょろ長く伸びて変色しているところ。むかしの人はそれはフェアリーが環になって

踊ったところと信じ、fairy-ring (フェアリーの環) と呼んでいる。

「英語歳時記」に載せられたこの詩の対訳によれば当該の個所は「長いまだらのフェアリーの環をわけてゆこう。」となっているが、イエーツのマニュスクリプトには And walk and walk through summer grass, としたものがあり、fairy ring を指すという解釈はゆきすぎではないかという感じがする。厨川白村は dappled に注して COD の variegated with rounded spots or patches of colour or shade という定義を載せており、白村が借用した矢野峰人訳では「また、斑なす高草を押しわけゆきて」となっている。一方、河出版世界文学全集の世界20大詩人集のイエーツ篇に採られた西条八十訳では「かくて長き、斑(まだら)なる草のうちをあゆみ、」となっている。ちなみにこの章のタイトルに用いたいくぶん古風なこの詩の邦題も同じ西条訳を借用したものである。

一方、ボストンの Little, Brown and Company 社刊の *Familiar Quotations* には正味1ページ半以上におよぶイエーツからの引用の数々を載せているが、この詩からは17-24すなわち Stanza 3の全文を掲載している。それはいうまでもなくこの詩の最後2行の対句が、そして中でも最後の1行が読者に与えるインパクトがあまりにも強烈であるために他ならないだろう。

白村とイエーツ

ラフカディオ・ハーンがイエーツを当代随一の妖精詩の作者と見做していたように厨川白村にとってもイエーツは漂渺とした夢幻的雰囲気をもたえた抒情詩人としてうつっていた。序論で触れたイエーツ詩通訳に付した解説の中で白村は20世紀に入ってイエーツの詩風が一変したことを次のように慨嘆している。

…即ち *The Wandering of Oisín* (1889) から *The Wind among the Reeds* (1899) に至るころ迄の詩集には、神秘的色彩に富み、夢幻的な、象徴詩の風格ある作品が多かった。Celt 人特有の神話伝説を材料にした空霊漂渺たる詩風のものであった。然るに、今世紀に入ってから Yeats の詩集 *In the Seven Woods* (1903), *The Green Helmet and Other Poems* (1910), *Responsibilities* (1914) などを繙くと、誰しも今昔の感に堪へないほどに詩風が変化してゐる。神秘夢幻の特色は失は

れて、平明な詩風となり、以前の作に比して遙に簡素な——わるく云へば散文的な物となって、かつて Yeats の詩境であった dreamland から遠く離れて了った観がある。

そして白村は語をついで、

此一卷 (= *Later Poems* 筆者注) を繙いて、かの青春時代はじめて詩界に名を成した頃の Yeats —— 殊にかの symbolist, mystic の風格を帯ぶる事甚しき “The Wind among the Reeds” の Yeats 今はた何処にありやと怪むものは、独り私のみでなからう。lyric poet としての Yeats の greatness は、やはり前世紀末の作品にあったやうだ。

とまでいい切っている。

“The Celtic Twilight” と「遠野物語」

詩集 *The Wind among the Reeds* 所収の詩篇には作者自身が付した詳細にわたる notes があり、それによってそれぞれの詩の成立事情を知ることができる。“The Song of Wandering Aengus” に付された note については厨川白村もこの詩の注訳の中で引用しているので、白村の文章を紹介する意味でそのまま借用することにする。

……作者 Yeats は、自ら此篇に附した notes のうちに：

“The poem was suggested to me by a Greek folk song ; but the folk belief of Greece is very like that of Ireland, and I certainly thought, when I wrote it, of Ireland, and of the spirits that are in Ireland.”

と云ひ、Galway 地方の或老人から聞いた話と云ふのを附記してゐる。即ち或る朝のこと、その老人が木を切つてゐると、そこに一人の美女が栗拾ひをしてゐるのを見た。ふさふさした髪を肩に垂らした美しい丈たかき女で、耳には何の飾りも付けてゐなかつた。ふと老人の姿を見るや否や、かき消すごとくに其女は見えなくなった。あとを、いくら尋ねて行つても、遂に再び見る事を得なかつたと云ふ。

イエーツの詩篇を、ゴールウェイ地方の老人から聞いたというこの話の再話であるとすれば、それはまさしくわが国の「遠野物語」の世界にも似た素朴な神仙の世界である。ケルトの血をひくラフカディオ・ハーンが日本の怪談に心をひかれたり、イエーツ初期の詩に魅せられたりしたのも思えば偶然とはいえない。もっとも「遠野物語」初版の刊行は明治43年（1911）のことでハーンの没後数年を経過している。ちなみに今日だれ一人知らぬ者のない名篇「遠野物語」も発表当時は大して顧みられなかったという。そういう中であつてかの泉鏡花ひとり言葉を尽くして絶讃したという事実がある。尤もといへば尤もな話である。初期のイエーツとハーンの間をそっくりそのまま「遠野物語」の柳田国男と鏡花の間に置きかえてみる事ができそうである。試みに「遠野物語」初版から2篇を抜粋して、アイルランド版「遠野物語」ともいふべき“The Celtic Twilight”から抜き出した小話と対照させてみることにする。

八 黄昏（たそがれ）に女や子供の家の外に出てゐる者はよく神隠しにあふことは他（よそ）の国々と同じ。松崎村の寒戸（さむと）といふ所の民家にて、若き娘梨の木の下に草履（ぞうり）を脱ぎおきたるまま行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、ある日親類知音の人々その家に集まりてありし処へ、きはめて老いさらぼひてその女婦り来たり。いかにして帰つて来たかと問へば、人々に逢ひたかりしゆゑ婦りしなり。さらばまた行かんとして、ふたたび跡を留めず行き失せたり。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりといふ。

Sometimes those who are carried off are allowed after many years — seven usually — a final glimpse of their friends. Many years ago a woman vanished suddenly from a Sligo garden where she was walking with her husband. When her son, who was then a baby, had grown up he received word in some way, not handed down, that his mother was glamourèd by faeries, and imprisoned for the time in a house in Glasgow and longing to see him. Glasgow in those days of sailing-ships seemed to the peasant mind almost over the edge of the known world, yet he, being a dutiful son, started away. For a long time he walked the streets of Glas-

gow ; at last down in a cellar he saw his mother working. She was happy, she said, and had the best of good eating, and would he not eat? and therewith laid all kinds of food on the table ; but, he knowing well that she was trying to cast him the glamour by giving him faery food, that she might keep him with her, refused and came home to his people in Sligo.

十八 ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門といふ家には、童女の神二人いませりといふことを久しく言ひ伝えたりしが、ある年同じ村の何某といふ男、町より帰るとて留場（とめば）の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢へり。物思はしき様子にてこちらへ来る。お前たちはどこから来たかと問へば、おら山口の孫左衛門が処から来たと答ふ。これからどこへ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答ふ。その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮らせる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなどと思ひしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸の毒にあたりて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近き頃病みて失せたり。

.....A friend of his and mine went to see him a little time ago, for she heard that 'three of them' had told him he was to die. He said they had gone away after warning him, and that the children (children they had 'taken,' I suppose) who used to come with them, and play about the house with them, had 'gone to some other place,' because 'they found the house too cold for them, maybe'; and he died a week after he had said these things.

イエーツの *Mythologies* ("The Celtic Twilight" はその巻頭を飾るものである。) と柳田の「遠野物語」は「人煙の稀少なる」(「遠野物語」初版序文より) 集落に古くから伝えられ、しかも「なおよく昔ぶりを保つ数々の物語」(角川文庫版「遠野物語」の blurb より) を、愛惜の心をこめて集録したというその成立過程からして共通するところが大きであったことに注目したい。事実、柳田国男は「遠野物語」初版の序文において高らかにこう宣言した。

思ふに遠野郷にはこの類の物語なほ数百件あるならん。われわれはより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所には、また無数の山神山人の伝説あるべし。願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝呉広のみ。

おそらくイェーツの心にも相通じるものがあつたものと思われる。

レイ・ブラッドベリの短編 “The Golden Apples of the Sun” について

アメリカの作家ブラッドベリは今や押しも押されぬ SF 界の第一人者である。もっともそれはあくまでも世評においてそうなのであり、その実体は決して SF 作家の範疇に収まりきれない多彩な作家であり、SF を純文学の領域にまで引き上げた功労者と見做してさしつかえないであろう。略伝によれば彼は高等教育を受けることなく、もっぱら読書によって今日を築き上げた人である。「図書館が私の大学であった。」との発言さえあるほどである。短編集 *The Golden Apples of the Sun* (1953) はその vintage years とされる 1945—1955 年の時期のまっただ中に書かれた短編 22 篇を集めたもので、タイトルは巻末に載せられた表題作によるものである。その巻頭を飾る “The Fog Horn”, それにつづく “The Pedestrian” 等の名作を含むこの短編集はブラッドベリの初期を代表する作品集といっても過言ではない。ところで表題作の “The Golden Apples of the Sun” はギリシア神話の quest for the golden apples; Prometheus; Icarus の話を下敷きにした典型的な SF フェンタジーである。宇宙ロケット「コパ・デ・オロ (黄金杯)」号は太陽のかけらを地球に持ち帰らんと太陽を目指してまっしぐらに突進する。

“South,” said the captain.

“But,” said his crew, “there simply *aren't* any directions out here in space.”

“When you travel on down toward the sun,” replied the captain, “and everything gets yellow and lazy, then you’re going in one direction only.” He shut his eyes and thought about the smoldering, warm, faraway land, his breath moving gently in his mouth.

“South.”

Their rocket was the *Copa de Oro*, also named the *Prometheus* and the *Icarus*, and their destination in all reality was the blazing noonday sun. In high good spirits they packed along two thousand sour lemonades and a thousand white-capped beers for this journey to the wide Sahara. And now as the sun boiled up at them they remembered a score of verses and quotations :

“The Golden apples of the sun’?”

“Yeats.”

“Fear no more the heat of the sun’?”

“Shakespeare, of course!”

“Cup of Gold’? Steinbeck. ‘The Crock of Gold’? Stephens. And what about the pot of gold at the rainbow’s end? *There’s* a name for our trajectory, by God. Rainbow!”

“Temperature?”

“One thousand degrees Fahrenheit!”

ブラッドベリはイエーツの詩句を借用してはいるものは、ここにはケルト的色彩は全く感じられず、従ってイエーツ的な要素が完全に排除されて純粋にギリシア的色彩にいろどられたイメージに転換されているというか、あるいはイエーツの詩篇の中に盛り込まれたギリシアの要素だけが抽出されて用いられていることがわかる。

ウェルティとイエーツ

米国の南部作家のうち女流を代表する一人であるユードラ・ウェルティに関しては、彼女とさまざまなインタビューアたちとの対談を集めた *Conversations with Endora Welty* という本が出ている。その中で彼女は「詩人のうちではイエーツが最も好きであり、若い頃は特に初期のイエーツが好きであった。」と明言している。

Interviewer: What poet do you particularly admire?

Miss Welty: I like Yeats best, I think.

Interviewer: Early Yeats.....?

Miss Welty : I used to like the early poems when I was young. But now I love all the poems. I can see what he did continually with his gift. He made of himself a second poet out of the first.

事実ウェルティの第一短編集 *The Curtain of Green* 所収の作品中にはおそらくイェーツを念頭に思い浮かべながら書いたと思われる作品がある。“A Visit of Charity” がそれである。

ガールスカウトの1少女が隊員としての点数かせぎに花束をもって女性専用の老人ホームを慈善訪問する。人生の悲哀を未だ体験したことのない純真無垢な彼女は、陰惨な院内の1室で2人の老女から老醜のありったけを見せつけられてほうほうの態で退散する。院内に入るに先だつたとげのある生垣の中に隠しておいたリングをとり戻し、バスに乗るとすぐさま彼女はリングにかぶりつくのである。

Under the prickly shrub she stooped and quickly, without being seen, retrieved a red apple she had hidden there.

Her yellow hair under the white cap, her scarlet coat, her bare knees all flashed in the sunlight as she ran to meet the big bus rocketing through the street.

“Wait for me!” she shouted. As though at an imperial command, the bus ground to a stop.

She jumped on and took a big bite out of the apple.

いうまでもなくここではリングが青春をシンボライズする小道具の一つとして鮮やかな手法で用いられている。

ブラッドベリに短編集 *The Golden Apples of the Sun* があるように、ウェルティにも短編集 *The Golden Apples* (1949) がある。但しこれは巻頭の“Shower of God” 以下全7篇を総括するタイトルであつて、表題作によるものではない。この短編集については *The American Short Story 1945-1980, A Critical History* の中で著者 Dennis Vannatta が簡潔な、しかもすどい分析を行なっているのでここに引用する。文中の King Maclain は巻頭に収められた“Shower of Gold” の主人公である。

The Golden Apples is united by Welty's use of the mystical

quest for the Golden apples. Just as King MacLain is a wanderer searching for gold of his own, so, too, are other residents searching for meaning in their lives. Some may leave Morgana for a time, but eventually all return in an attempt to understand their ties with the town.....

もっともウェルティ自身は自作を好き勝手に分析されることを好まないようである。既述の対談集には次のような一節もある。

Jones : *The Golden Apples* came out in 1949. I read it for the first time in preparation for this interview and found it to be my favorite of what you've written. It was so good and complete I couldn't think of a good question to ask you about it other than to just ask you to comment on it a bit more, and maybe tell me something about the idea behind it and what interested you about the golden apples myth.

Welty : Well, you know, now I think I'd think twice before I threw around myths and everything so freely. I'm glad I did them because I just used them as freely as I would the salt and pepper. They were part of my life, like poetry, and I would take something from Yeats here and something from a myth there. I had no system about it. But people write papers on these things and they just make things up.....

とはいえ、ウェルティ女史の作品にイエーツの、殊に初期のイエーツからの影響が随所に見られることは歴然とした事実である。ちなみに彼女の第4短編集 *The Bride of the Innisfallen* (1955) のタイトルは巻頭に収められた表題作から採られたものであり、当の表題作は彼女のヨーロッパ旅行の体験をもとに書かれた作品の一つであるが、作中に登場するアイルランド南部の港町 Cork へのフェリー船の名 the Innisfallen はイエーツ初期の詩の中でもおそらく最も有名な“The Lake Isle of Innisfree”を連想させずにはおかない。それどころか、一人の若妻がイングランド（しかもロンドン）での結婚生活の挫折による傷心をはるかアイルランドの港町に来て癒やすというこの小説のプロット自体、イエーツの詩の再話に他ならないといえる。

結 論

前章までに筆者は主にイエーツの短詩“The Song of Wandering Aengus”の中に盛り込まれているアイルランド民話的要素とギリシア神話的要素を別個にとり上げて論じてきたつもりであるが、この詩には見のがしてはならないもう一つの要素が込められている。そのことについてはイエーツ自身 notes の中で次のようにほのめかしている。

The man in my poem who has a hazel wand may have been
Aengus, Master of love.

とすればこれは古代からアイルランドの地に伝わるケルト族の神話の世界なのである。最近刊行された *The Aquarian Guide to British and Irish Mythology* の Angus mac Og/Aengus/Oengus の項にはイエーツの付した note の補注にすべき格好の記述がある。イエーツの「さまよえるエンガスの唄」がこの神話の再話であるという指摘も見のがせない。

An eight-century text, ‘Aislinge Oenguso’ (The Dream of Angus), tells how he was visited by an otherworldly maiden, *Caer Ibor-meth*, in his sleep and conceived such a love for her that he fell ill until he found her, with the help of *Bodb*. She was in the form of a *swan* one year and assumed human shape the next. He found her at Loch Bel Dracon at *Samhain*, together with 149 other girls all in swan-form, with silver chains between each pair. Angus also assumed the form of a swan, and together they circled the lake three times, singing sleep-music so profoundly moving, that everyone in the vicinity fell asleep for three days and nights. They returned to his otherworldly palace, *Bruig na Boinne* (New Grange, Meath). W. B. Yeats’ poem ‘The Song of Wandering Aengus’ is a retelling of this event.

要するに“The Song of Wandering Aengus”は憂国の美女 Maud Gonne へのかなえられぬ愛のおう悩の発露であると同時に、アイルランド民話、ギ

ロシア神話、アイルランド神話の三要素を混然一体化させながら、なおかつ simplicity を保ち、平明な詩句の中にも神韻漂渺とした雰囲気をかもし出している比類のない作品といえるのではなからうか。それゆえに1篇の短詩でありながらよく万人の心をとらえ得たのであり、また、名言名句の出典として多くの作家に対して絶大の影響力を発揮し得たのではなからうか。

参考書目

- Poets and Poems* Lafcadio Hearn, (田部隆次編), 北星堂, 昭和3年
現代英詩選釈, 厨川白村, アルス, 大正14年
遠野物語, 柳田国男, 角川書店, 昭和57年
Mythologies, W. B. Yeats, Macmillan, 1984
The Golden Apples of the Sun, Ray Bradbury, Bantam Books, Inc. 1970
The Collected Stories of Endora Welty, Penguin Books Ltd, 1983
The American Short Story 1945-1980, A Critical History, Dennis Vannatta, G. K. Hall & Company, 1983
The Aquarian Guide to British and Irish Mythology, John and Caitlin Mathews, The Aquarian Press, 1988
Poems of W. B. Yeats, A New Selection, Macmillan, 1984
The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats, Edited by Peter Allt and Russel K. Alspach, Macmillan, New York, 1957
Familiar Quotations, Editor Christopher Morley, Associate Editor Lonella D. Everett, Little Broun and Company, 1951
Conversations with Eudora Welty, Editted by Peggy Whitman Prenshaw, University Press of Mississippi, 1984

Early Yeats and His Influence — Centering Attention on “The Song of Wandering Aengus”

Yoji Kawano

Early Yeats, when he started his career in literature with the collections of poems such as *The Wandering of Oisín and Other Poems* and *The Wind among the Reeds*, also devoted his young passion to the study of Irish folklore, the result of which might be seen most clearly in “The Celtic Twilight.” Incidentally, this collection of folk tales and Kunio Yanagida’s *Tōno Monogatari* (*The Folktales of Tōno County*) have much in common by a curious coincidence. On the other hand, neither Lafcadio Hearn nor Hakuson Kuriyagawa, the remarkable figures in the field of literary criticism of the era, lived to see later Yeats. The former regarded him as a fairy poet, while the latter evaluated him as a mystic poet. “The Song of Wandering Aengus”, one of the poems in *The Wind among the Reeds*, — especially the phrase, “the golden apple of the sun,” the most impressive line of the poem, has influenced many a writer of fiction, including American writers such as Ray Bradbury and Eudora Welty, to this day. There are at least three elements, Greek myth, Irish folklore and Irish myth, together with the anguish of his unattainable love of Maud Gonne, fused harmoniously in this particular poem.